

# 近代化からの「避難所」としてのヴェネツィア

——「前近代」都市が「過去主義者」たちに意味したもの

鳥 越 輝 昭

## 〈目 次〉

はじめに

1. ヴェネツィアの「前近代性」
  2. ヴェネツィア評価の好転
  3. 近代化からの「避難所」
  4. ウォーとヴェネツィア
  5. 荷風と京都
  6. ウォー、荷風、レニエの共通性
  7. 「楽園」としてのヴェネツィア
- おわりに

## はじめに

この拙稿では、都市ヴェネツィアが「過去主義者 *passatista*」——ジェイムズ、レニエ、ウォー、プロツキー——たちに対して持った意味を考えてみたい。その際、彼ら以前の文学者たちの姿勢と比較をするとともに、また京都に対する日本の「過去主義者」永井荷風の姿勢も対照して、意味明確化の助けにしたいと考えている。

「過去主義 *passatismo*」は、F・T・マリネッティ (F. T. Marinetti, 1876-1944) 等「未来主義者 *futurista*」を自称したグループが非難のために使用した用語である。「未来主義者」が唱えた「未来主義 *futurismo*」は、じつは「近代主義」である。「未来主義」が「近代主義」であることは、マリネッティが「未来主義 *futurismo*」の特徴をこう述べているところから知られる。

健康的忘却、希望、熱望、制御された力、意志、秩序、規律、方法。大都市の感覚。筋肉崇拜・スポーツから生じる攻撃的楽観主義、観光・営利主義・ジャーナリズムに由来する、脈絡のない想像、遍在性、同時性。成功

への情熱、記録をめざす最新の本能、電気と機械の熱心な模倣。本質的簡潔性と総合性。歯車のようなすぐれた正確さと、潤滑油の効いた思考のすぐれた正確さ。競合しつつ唯一の勝利の放物線に収斂してゆくエネルギー (Lo Splendore geometrico e meccanico e la sensibilità numerica, 1914\*)。

ここには、進歩への信頼、前進への意志、秩序への志向、都市性への愛好、機械性への賛美、といった特徴が見られるが、それらは近代化推進派の価値観の一覧とあってよい。上で「未来主義」とは「近代主義」のことだといったのは、それゆえである。

この「未来主義=近代主義」にマリネッティ等が対置したのが「過去主義」だが、その内容は、マリネッティが「過去主義的美」の特徴を述べたつぎの箇所から知ることができる。

想い出、郷愁、時間的距離によって作りだされる伝承の靄、空間的距離によって作りだされるエキゾチックな魅力、絵画性、不正確さ、田園趣味、未開的孤独、多色の無秩序、黄昏の薄闇、腐食、消耗、年経て汚れた痕、廃墟の崩壊、黴、腐敗の味、悲観主義、肺結核、自殺、苦悩への誘惑、失敗の美学、死への崇拜 (Ibid.)。

ここでは、「明晰にして判明」(デカルト)なものを嫌い、「今」と「ここ」と「前進」を嫌う精神のありかたが批判されていることがわかる。マリネッティ自身は、こういう特徴を備えた「過去主義」を「ロマン主義的、象徴主義的、退廃主義的

なもの」というふうにも言いかえている。しかし、わたくしの観点からいえば、これは要するに、「近代性」・「近代化」への懐疑ないし批判、あるいは「近代性」・「近代化」からの脱落、の現れと捉えることができると思う。すなわち「過去主義」は、「反近代主義」または「脱近代主義」の別称である。「過去主義」という用語は、そういう姿勢を一括するのに便利であるので、本稿でも借用しようと思う。わたくしが使う場合の「過去主義」が非難の意味を含んでいないのは、むしろである。

### 1. ヴェネツィアの「前近代性」

ヴェネツィアにとって、時代区分としての「近代」は1797年に始まった。しかしヴェネツィアの「近代化」はかなり遅れ、「前近代性」を多く留めることになる。

ヴェネツィアは数百年にわたって貴族階級が独占的に統治してきた都市国家であったが、1797年、ナポレオン軍の圧力により、貴族階級がみずから統治権を放棄した。これにより都市国家ヴェネツィアには政体の変革が生じただけでなく、国際的地位と経済状態にも大きな変革が生じた。この変革とともにヴェネツィアは「近代」という時代に入った。

貴族政治崩壊ののち、都市ヴェネツィアは、短期間のフランス傀儡政権による統治、オーストリア帝国編入、フランス帝国（ナポレオン勢力下の「イタリア王国」）編入の経験を経て、1814年に再度オーストリア帝国に編入された。この二度目のオーストリア支配は1814年から1866年に及んだ。ただし、1848年3月から翌年8月までは、ヴェネツィアがオーストリアに反抗・独立していた期間である。1866年は、ヴェネツィアがイタリア王国に編入された年である。二度目のオーストリア支配は、都合50年を超えたわけである。

経済的に見ると、この過程でヴェネツィアに起きた最大の出来事は、一地方都市の地位に転落したことである。18世紀、貴族政治崩壊以前のヴェネツィアも、すでに東西の仲介交易都市としての性格は薄れ、かつての商業的繁栄を失っていたが、この都市国家はまだイタリア本土に、北はオーストリア・スイスと境を接し、南はフェラー

ラ・マントヴァに迫り、西はミラノに迫る、かなり広大な領土を所有していた。この領土が農業的にも商業的にも都市ヴェネツィアにとって後背地の役割を果たし、ヴェネツィアはそこから富を吸い上げていた。グラッシ邸のような大邸宅や、ジェズアーティ教会のような大教会、そしてまたフェニーチェのような立派な劇場が18世紀にできた建物であることが、吸い上げた富の大きさを物語っている。

ところが1797年以後、都市ヴェネツィアは、それまで豊かな富をもたらしていたこの後背地から切り離され、一地方都市に転落した。もとの後背地は、他国に富をもたらす場所へと役割を変えた。1866年にイタリア王国に編入されたのちのヴェネツィアは、一地方の中心都市という性格を備えることになるが、経済復興はなおしばらく実現しなかった。その結果、18世紀末から20世紀初頭にかけてのヴェネツィアは、はなはだ貧しい都市となった。1824年の統計によれば、人口の4割近くが生活保護を必要としていたし<sup>\*2</sup>、20世紀初頭にもやはり人口の3分の1が生活保護を必要としていたのである<sup>\*3</sup>。

こういう政治的・経済的な状態のなかで、都市ヴェネツィアの「近代化」は、19世紀半ばからゆるやかに始まった。「近代化」を象徴する出来事のひとつは、1846年に島ヴェネツィアとイタリア本土とのあいだに鉄道が開通したことである。この鉄道は1857年にはヴェネツィアとミラノとを結ぶことになる。またそれより前の1843年に試験的に導入されたガス灯が、1870年には市内各所を照らすようになっていた。また1868-71年には、鉄道駅と市中心部との往来を容易にする「新道 Strada Nuova」が建設された。1870年からは「海岸駅 Stazione Marittima」の建設が始まったが、これは従来の港湾施設に替わる大規模施設を建設しようとしたものである。1872年には蒸気船の運行が開始された。1884年には上水道も導入された。1883年にはストゥーキー製粉所が設立され、事業を拡大していった。また、リド島にはオテル・デ・パン(1900)、オテル・エクセルシオル(1908)といった大ホテルが建てられ、観光業の繁栄を証明していた。

しかし、島のヴェネツィアはこの時期から「近代化」の歩みをおおむね止める。それを象徴する出来事が1932年に起こっている。この年、ヴェネツィアとイタリア本土とのあいだに自動車橋が開通したが、自動車は橋を渡り終わった広場までしか乗り入れを許されないことにされた。これはヴェネツィアへ「近代化」がそれ以上進入するのを拒否する姿勢の表明であったろう。

島のヴェネツィアが「近代化」の歩みを止めた代わりに、「近代化」は、潟を挟んだイタリア本土のマルゲーラ地区を中心に展開することとなる。この地区では、1917年から工業開発がおこなわれ、1920年代末には、すでに化学・金属・機械・造船・石油・電気工業施設を備える工業団地を形成した。この工業団地は順調に成長し、1935年には52の工場と6,442人の従業員を擁し、1939年には71の工場と18,872人の従業員を擁するようになる。最盛期1967年には、この地区は218の工場と31,140人の従業員を擁する大工業団地に成長した<sup>4</sup>。

1926年には、この工業団地マルゲーラを含む本土のメストレ地区がヴェネツィアに吸収合併され、その他の島々と合わせて、「大ヴェネツィア市 Grande Venezia」が形成された。ヴェネツィア市は、こうして島の「旧市街 Centro Storico」——われわれが「ヴェネツィア」と聞いたとき思い浮かべる島——だけでなく、本土側の「新市街」メストレ地区を合わせ持つ都市になってゆく。しかも1950年代以後、「旧市街」から「新市街」への人口流出が相次ぎ、1993年には、ヴェネツィア総人口304,485人のうち184,800人はメストレに住まい、「旧市街」には73,149人しか住まわなくなった。

メストレ・マルゲーラ地区開発以後の展開を要約すれば、ヴェネツィア市は、おおむね「前近代的」性格を多く残す島の「旧市街」と、「近代的」性格の「新市街」という二種の異なった性格を備える都市になったといえる。また、ヴェネツィア市全体から見れば、「新市街」の「近代的」性格がしだいに優勢になっていったといえるだろう。

さらに、18世紀末から現在に至る都市ヴェネツィアの性格を大きく捉えれば、ヴェネツィア本

島＝「旧市街」は、19世紀にも20世紀にも、あまり大幅な「近代化」の歩みを進めず、「前近代的」特徴を多く残したまま20世紀末を迎えたといえそうである。そして、20世紀ヴェネツィアの「近代化」は、もっぱら本土側の「新市街」が担ったといえよう。

ヴェネツィアは1987年にユネスコの「世界遺産」に登録されたが、その登録のされかたにも、18世紀末以後のヴェネツィアの歴史が反映しているといえる。この町は「ヴェネツィアとその潟 Venice and its Lagoon」として、いいかえれば、ヴェネツィア本島＝「旧市街」全体とその周囲の潟が——もちろん「新市街」は除外されて——「世界遺産」に登録された<sup>5</sup>。この登録のされ方は適切だと思われる。なぜならヴェネツィアの「旧市街」では、端から端まで1時間程度で歩ける範囲に、11世紀の聖マルコ聖堂や14世紀の統領宮殿から、15世紀のカ・ドーロ邸、16世紀のヴェンドラミン・カレルジ邸、17世紀のサルテ教会、18世紀のジェズアーティ教会というように、数世紀にわたる多様で豪華な建物が数多く残っているばかりではない。重要なのは、「旧市街」では、名もない粗末な家並みもまた古建築物だということである。ヴェネツィアの「旧市街」には、「前近代」が本質的に「面」として残存している。

その状態を、1994年にやはり「世界遺産」に登録された京都の場合と較べてみると違いがよくわかる。京都の場合には、「古都京都（京都市・宇治市・大津市）の歴史的建造物」という登録のされかたになっている<sup>6</sup>。これは「面」として登録されたヴェネツィアとは対照的に、複数の「点」が「世界遺産」に登録されたということを意味する。京都は、ヴェネツィアとほぼ同年齢の（どちらもおよそ1000年の歴史を持つ）旧都でありながら、1895年に日本最初の路面電車を導入したことが象徴するように、ヴェネツィア「旧市街」とは対照的に、「近代化」を積極的に進めてきた都市である。その基本性格は1997年完成のJR新京都ビルにまでつながる。それゆえ京都の市街はまた、基本的には近代建築で出来ており、古建築はその周辺に点在しているにすぎない。したがって「世界遺産」への登録のされかたは、まことに適切

なわけである。

## 2. ヴェネツィア評価の好転

さて、上に略述したような都市ヴェネツィアの「前近代性」が、歴史のなかのある時期から、プラス価値に転じる現象が起こった。まずその時期の点について検討してみよう。

検討に当たっては、対照のためにそれ以前の状態を瞥見するのがよいだろう。ひとまず18世紀まで遡ると、ヴェネツィア共和国については、倫理的墮落や文化的爛熟を指摘した人たちが多かった。たとえば、モンテスキュー (Montesquieu, 1689-1755) が旅行記に記したつぎの感想は代表的なもののひとつである (なおこのあたりの事情については、拙著『ヴェネツィアの光と影——ヨーロッパ意識史のこころみ』大修館書店, 1994を参照くだされば幸いである)。

わたくしの眼はヴェネツィアに大いに満足している。しかし、わたくしの心と精神はまったく満足していない。わたくしは、全然好感を持たれるようになるうともせず高潔になるうともしない町を、まったく愛することができない\*7。

英人政治家・随筆家アディソン (Joseph Addison, 1672-1719) も旅行記 *Remarks on Several Parts of Italy, &c* (1705年) のなかで、ヴェネツィアの政治に注目して、こういつていた。

彼らの政治の多くの部分は、他の諸国民なら実行するのを名誉と矛盾すると思うような原理に基づいている。すなわち、共和国を維持するためには、他のあらゆる考慮が従属させられるのである。貴族たちの無為と贅沢とを奨励することも、聖職者たちの無知と放埒とを育てることも、庶民のなかに常に派閥を活かしておくことも、修道院の悪徳と墮落とを黙認することも、イタリア本土の貴族たちのあいだに不和を生じさせることも、勇敢な人に軽蔑と屈辱とを与えることも、……要するに、公益のためには、いかなる手段でも平然

と使うのが、ヴェネツィア的知恵の洗練された一部分だといわれている\*8。

そして私人文筆家ド・ブロス (Charles de Brosses, 1709-77) の旅行記 *Lettres d'Italie* 中にみられるつぎの報告は、ヴェネツィアの倫理の弛緩を面白がっている内容である。

いまだに、みごとな手並みを見せている修道女たちもかなり多数おります。みごとな手並みというよりも、みごとな張り合いぶり、といったほうがよいかもしれませんがね。あなたに手紙を書いているちょうどいまも、着任したばかりの新しい教皇大使にどの女子修道院が愛人を提供する光栄に浴することができるかどうかを決めようと、町の三つの女子修道院のあいだで熾烈な策略合戦がおこなわれているところなのです\*9。

また、この町の倫理的墮落や文化的爛熟が目目されたのち、1797年にヴェネツィア共和国が滅亡すると、しばらくは、一方に過去の栄光へのノスタルジアを語る人たちが多く、また一方に共和国衰頹の原因を探り他山の石としようとする人たちが多かった。たとえばつぎに見る英詩人バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) の *Childe Harold's Pilgrimage, IV* (1818年) の一節は、滅んだ栄光へのノスタルジアを述べた典型である。

千年の歳月がぼくのまわりで雲の翼を広げ  
死を間近にした栄光が、はるか昔にほほえみ  
かける  
かつて多くの被支配国は、翼の生えた獅子の  
付いた  
大理石の大建築を見守り  
ヴェネツィアは堂々と、百の島々に君臨して  
いたのだが\*10

独詩人プラーテン (August von Platen, 1796-1835) のソネット (1834年) の一節もまた同様である。

ヴェネツィアは夢の国のなかにのみあり  
昔日のなかから影だけを投げてよこす  
共和国の獅子は撲殺されて横たわり  
牢獄も人気なく休息している\*11

一方、ヴェネツィア共和国の衰頹から教訓をえようとした人に、たとえばダリュール (Comte de Daru, 1767-1829) がいた。その大著 *Histoire de la république de Venise* (7 vols., 1819) 執筆の問題意識のひとつは、「堅実な原則と努力とによってこの共和国があれほどの勢力と栄光の高みに達したのを見たあとで、国の内部の欠陥ゆえに、いかにしてあのような孤立的・不活発・受動的な状態が生じたか……を観察するのも、われわれのためになるだろう\*12」, というものであった。またラスキンの大著 *The Stones of Venice* (3 vols., 1851-53) にも同様の問題意識が見られた。

町の微かな姿が永久に失われてしまわぬうちに、わたくしはその姿の輪郭を辿りたいと思う。そして臨終の鐘の音のような音を立てながらヴェネツィアの諸石を打ち、それらを急速に飲み込もうとしている波の一つひとつが口に行っているように思える警告を、できるかぎり記録したいと思う\*13。

上記三種のヴェネツィア認識は、程度の差はあるしプロスの場合は異なるけれども、おおむね否定的評価といってよいだろう。しかしラスキンの文章にやや先立つ 1834 年に、仏人文筆家ジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-76) が発表したヴェネツィア評価には好転の兆しがみられる。サンドの *Lettres d'un voyageur* の一節は、こう書き始められていた。

ヴェネツィアが、これほど衰え抑圧され貧しくなりながら、時勢によっても人間によっても、自分の美しさと平静さを傷つけさせないで見れば、わたくしは平和に眠っていることができるというものだ (p. 85\*14)。

サンドの文章をヴェネツィアの——あるいは

ヴェネツィア人の——「平静さ」という側面についてだけ見れば、主張はつぎのように展開していた。

ここの漁師たちは、向こう岸の敷石の上に、夏も冬も、入れ墨をした皮膚以外の布団もなく、御影石の階段以外の枕もなく眠っているのだが、彼らもまた〔この町と同様に〕みごとに哲学的ではないか。この人たちは、一ポンドの米すら買えないときにも、空腹を忘れるために、声を合わせて歌を歌う。寒さ暑さと突然の嵐に慣れている彼らは、そうやって支配者たちと貧困とに対抗するのである。長らく祭りと娯楽に養われてきたこういう楽天的で軽薄な性質を野蛮化させるには、何年もの隷属状態が必要だろう (Ibid.)。

ヴェネツィアの生活はいまだにじつに簡素である。自然はじつに豊かで、簡単に利用できる。海と潟には魚や鳥があふれている……。庭の産物もすぐれている。地味豊かな一角は、本土の畑以上に豊富な果物・花・野菜を産出する。何千もの小島からも、……果物や花や野菜を積んだ小舟がやってくる。関税の掛からないここの港には、外国の安い食料が届く。……だからヴェネツィアでは、毎日の食費は、いちばん金が掛からない品目である。しかも、商品の届けられ方が簡単なので、住人の生来の怠惰さが高じる。食物が、戸口まで船で届くのである (pp. 85-6)。

ここから、サンドはヴェネツィアの庶民とパリの平均的市民との比較に移る。

こういう快適な生活と、ヴェネツィアの最下層の労働者よりもひどい食事をするために、パリの平均的家族が毎日しなければならぬ果てしない苦勞とのあいだには、なんと大きな違いがあることか。それにまた、パリの混雑のなかを、肘でかき分け押し退けながら進む、泥に汚れた群衆の顔に浮かぶ深刻で心配そうな表情と、好きなときに波止場の温かく

滑らかな石の上を歌いながら歩き回ったり、その上に寝そべったりする、ヴェネツィア人ののんきそうな足取りとのあいだにも、なんと大きな違いがあることか (p. 86)。

サンドは、政治的・経済的には恵まれているはずのパリ市民よりも、貧困にあえいでいるはずのヴェネツィア庶民の方が、かえって快適に心のどかに生きている、という逆説を指摘しているわけである。

サンドの文章から 60 年後 (1892 年) に発表された米人作家ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) のエッセイ 'Venice' にも、同様の対比がみられる。

ヴェネツィア民衆の住居は崩れ、税金は高く、ポケットは軽く、働く機会はほとんどないに等しい……けれども、彼らは、よりよい条件に恵まれている多くの人たちよりも人生と良好な関係にあるように感じられる。ヴェネツィアの民衆は、陽光のなかに横たわり、水浴びをし、明るい色の檻をまとい、さまざまな姿勢や調和を見せ、はてしない会話に興じている。……自然はヴェネツィア人の気質に対して親切であって、陽光と閑暇と会話と美しい眺めとが彼らの気質をもっぱら支えている。アメリカ人を成功者にするには多くのものが必要だが、ヴェネツィア人を幸せにするには、一握りの敏感な感受性で足りる (p. 9\*<sup>16</sup>)。

さらに、時代的にはサンドとジェイムズのあいだに位置する、1866 年に、米人小説家 W・D・ハウエルズ (William Dean Howells, 1837-1920) の出版したヴェネツィア滞在記 *Venetian Life* 中の文章も注目される。そこでは、ヴェネツィアという都市とそこでの生活の仕方が米国人におよぼす影響力が語られている。ハウエルズは、ヴェネツィアののどかな春のなかで米国人がどういう状態になるかを、こう述べる。

〔ヴェネツィアの〕町のこういう静けさに

よって、そのなかにいる余所者も、悲しさや憂鬱さに取りつかれるのではなくて、「無為の心地よさ」という深い感覚と、あらゆる目的や機会への無関心さにと捉えられる。仮に自分の名前を人々の口端に登るようにしたいと思ったことがあったとしても、賞賛へのそういうあこがれは死滅する。こういう心地よい静けさのなかでは、賞賛はかえって苦痛だろう。では非難はどうか。何らかの努力をして非難をひきおこすのは、間違いじみたことに思える。人は休息というものの深奥の核心へ連れてゆかれ、その秘密を学ぶのである。これは、新世界の忙しい苦闘生活のなかには理解できない秘密である\*<sup>16</sup>。

こうして 19 世紀の 30 年代以後、ヴェネツィアとヴェネツィア的生活とに対する評価の好転が生じたのである。

### 3. 近代化からの「避難所」

さらに注目したいのは、ジェイムズによる上の対比の背後には明瞭な「近代化」批判があり、ジェイムズにはヴェネツィアを「近代化」からの「避難所」とみなす姿勢があったことである。その証明としては、ジェイムズのつぎのふたつの文章を並べてみるとよい。

たしかにヴェネツィアについては、新しくいうべきことは何もない。しかし、古いもののほうが新奇なものよりもよい。仮に何か新しいことをいう日が来るとすれば、それは心から悲しむべき日だろう ('Venice', p. 7)。

蒸気船は、すでに運悪く苦しい立場にあったゴンドラの船頭たちの没落を助け、立てる波で土台を崩して邸宅の崩壊を助け、大運河から平穏さという最高の長所を奪った。その一方で蒸気船はまた、ニューヨーク人のいう「高速輸送」を誰にでも可能なものにし、——それを断固拒否する者を除いて——誰もがヴェネツィアを、ニューヨークを走りまわると同じ猛烈な速さで走りまわると可能に

した ('The Grand Canal', 1892, p. 48\*17)。

ジェームズのこういう明快な姿勢を踏まえながら、あらためてサンドとハウエルズのヴェネツィア認識を見直せば、ふたりの場合にも、同時代社会の「近代化」に関する懐疑があって、それがヴェネツィア人の優越性あるいはヴェネツィアの「無為の心地よさ」賛美として表れたのだろう、と推測される。しかし、サンドとハウエルズの場合には「過去主義者」的な側面もあったという程度であろう。それに対して、ジェームズの場合には、「近代化」批判とヴェネツィアの「前近代性」賛美がきわめて明快であるから、純粋な「過去主義者」だといえる。

ヴェネツィアを「近代化」からの「避難所」あるいは「聖域」として愛する姿勢は、仏人作家アンリ・ド・レニエ (Henri de Régnier, 1864-1936) にも明瞭に認められる。1924年、レニエはエッセイ 'Venise retrouvée' のなかで、第一次世界大戦を挟んでほぼ十年振りにヴェネツィアを訪れたときの感想をこう綴っている。

わたくしは、来訪しなかった十年ののち、ヴェネツィアが、わたくしのかつて知り愛していたヴェネツィアとは別物になっているのではないかと懼れていた。だが、そうになってはいないことに気付いた。ヴェネツィアの相貌はあいかわらず同じである (p. 231\*18)。

われわれがいま注目したいのは、「ヴェネツィアの相貌」とその奥にある本質とをレニエがどう捉えているかである。レニエはいう。

ありがたいことに、ヴェネツィアにはまだ市街電車も地下鉄もない。そして高貴な静けさのなかで、あいかわらず、鐘楼々々の鐘の音が聞こえる。鐘の音は、近代化の時をまだ告げないでいてくれる (Ibid.)。

ここには、「過去主義者」レニエの「近代化」に批判的な姿勢が明瞭に表れているし、ヴェネツィアの「前近代性」を愛する姿勢もまた明瞭に表れ

ている。

ヴェネツィアの「前近代的」側面を積極的に評価する姿勢は、こうしてサンド、ハウエルズあたりから始まり、ジェームズやレニエを経て、近くは露人詩人ヨシフ・ブロッキー (Joseph Brodsky, 1940-1996) のつぎの態度表明にまで流れてくる一連の姿勢である。

ブロッキーは1992年に『ヴェネツィア——水の迷宮の夢 *Watermark*』のなかでつぎのように書いている。ブロッキーは、まず、ヴェネツィアを「近代化」しようとする各種の政策を批判する。

たしかに誰もが、彼女つまりこの都市 [=ヴェネツィア] に対する下心を持っている。とりわけ政治家たちや大企業がそうである。なぜなら、金ほど大きな将来を持っているものはないからだ。ついには、金が将来と同義語であると感じられるようになり、金が将来に注文をつけはじめる。ここから、大量の下らぬ計画が出てくる。やれ、この町を改造しようとか、ヴェネト州全体を中央ヨーロッパへの玄関口にしようとか、マルゲーラの港湾コンビナートを拡大しようとか、瀉のタンカーの通行量を増加させようとか、そのために瀉を掘り下げようとか……それらの目的はただひとつ、強姦である (p. 110-11\*19)。

そしてブロッキーは、ヴェネツィアに「近代化」政策が実現しなかったことを喜ぶ。

こういう連中は、トルコ人やオーストリア人やナポレオンを全部合わせたよりも危険であるし、大きな害を及ぼす。なぜなら、金は將軍たちよりも強力な軍隊を持っているからである。しかし、わたくしがこの都市をひんばんに訪れた17年のあいだに、ここではほとんど何も変わらなかった。……ベネロペの場合と同じく、ヴェネツィアを救うのは、求愛者たちの張り合い、つまり、資本主義の競争的性格（要するに金持ち企業のさまざまな政党への血縁関係）である (p. 112)。

そしてプロツキーは、ヴェネツィアを「前近代」のなまままにしておくと主張するのである。

月着陸を別とすれば、この20世紀はこの場所〔＝ヴェネツィア〕を手つかずのまま、ただそっとしておいたということによって、後世にもっともよく記憶されるかもしれない。すくなくとも、わたくしは、おだやかな介入についても反対を唱える者である (p. 115)。

#### 4. ウォーとヴェネツィア

上に見た文学者たちは産業（工業）社会化の進行した国々の出身であるばかりでない。注目すべき点は、これらの文学者が「近代化」を体現する大都市への居住経験があることである。すなわち、ジェイムズのニューヨーク・パリ・ロンドン、レニエのパリ、プロツキーのペテルブルグとニューヨークというぐあいである。また (*Venetian Life* 執筆以前に) ポストンに住んだことのあるハウエルズも、いちおうその群に加えてよいかもしれない。しかし、「近代化」の進行する大都市と「前近代的」なヴェネツィアを明瞭に対照させて、後者の美点を賛美した文学者としては、ウォーを挙げるべきだろう。

英人作家イーヴリン・ウォー (Evelyn Arthur Waugh, 1903-1966) に一編のエッセイがある。エッセイは、'Sinking, Shadowed and Sad——The Last Glory of Europe' と題され、1960年に英国の新聞『デイリー・メール』に掲載された。エッセイは、こう書き始められている。

ヴェネツィアは世界でもっとも美しい町である。ヴェネツィアは、アジアの大都市が年を経ているほどには古くない。ヴェネツィアはロンドンとほぼ同じ年齢である。19世紀のモラリストたちは、ヴェネツィアとロンドンを較べていたものである。二都はどちらも商業都市・海洋都市・帝国都市だ、と。そして、贅沢と虚飾に身をゆだねるなら、ロンドンの住民もヴェネツィア人と同様に衰亡の憂き目にあうだろう、と警告していた。

ロンドンは衰亡しなかった。周知のとおり、

今日、ロンドンには贅沢はほとんどなく、いさかかの虚飾もない。だがわれわれは、羞恥のあまり、ロンドンからは目を背ける。しかるにヴェネツィアは、われらの祖父の世代が予言したのとはまったく異なる意味での実証例となっている。仮に新世界のあらゆる博物館が空にされ、旧世界のあらゆる有名建築が破壊されても、唯一ヴェネツィアが救われるなら、生涯を喜びで満たすに十分なものが残るだろう。ヴェネツィアは、すべての複雑さと多様性とをともしつつ、それ自体が、世界に残っている最高の芸術作品なのである (p. 545\*20)。

そしてこのエッセイは、つぎのように結ばれている。

しかしヴェネツィアは沈みつつある。年毎に二、三インチずつ、町は瀉のなかに沈下を続けている。わたくしの生きているあいだにはないだろうし、わたくしの子供たちの生きているあいだであってほしくはないが、この町は、何時の日か静かに姿を消すだろう。そしてこの町とともに、ヨーロッパ最後の栄光も消え去るだろう。そのときにもまだ、今では陳腐なものとなり果てたワーズワスの詩行を覚えている人がいてほしいものだ。「そしてヴェネツィアが夫を得るときは、永遠の海と婚姻するのが必定であった」、という詩行である (p. 547)。

もう一つ、特に興味深いのは、エッセイの中程にあるつぎの記述である。

……わたくしは地元のジャーナリストを訪問した。あまり裕福ではない人であったように思う。わたくしはこのジャーナリストと、ある像のところで待ち合わせた。それからジャーナリストはわたくしの先に立ってトンネルや路地をいくつも抜けて行った (ヴェネツィアには豊かな地区と貧しい地区の区別がない)。そうやって抜け出たところに、ジャー

ナリストの家があった。家は、外見はつまらぬ建物で、イギリスの町であれば、当局が間違いなく取り壊しを命じそうな建物であった。アーチをくぐり、中庭にはいると、15世紀のアーケードであった。そこから階段を登ると、18世紀ロココ様式の漆喰細工で飾られた繊細な小部屋になった。このロココの漆喰細工は、イギリスの古美術愛好協会が取り壊し反対を叫びそうな（そして聞き入れてもらえぬ）類のものであった。ヴェネツィアには、こういう工芸品が、どこにでも、人目につかぬまま、数えられもせず存在しているのである（p. 546）。

見てのとおり、ウォーはロンドンと対照させながらヴェネツィアの美点を賞賛している。

対照の第一は、現在のロンドンは醜い町だがヴェネツィアは世界でいちばん美しい町だ、とする対照である。エッセイ中、「われわれは、羞恥のあまり、ロンドンからは目を背ける」というのは、明らかにロンドンが醜いという意味である。

ところでウォーは、「ヴェネツィアは世界でもっとも美しい町である」ということを自明の真理とみなしている。だから、エッセイ中にはヴェネツィアがどういう点で「世界でもっとも美しい町」なのかに関する具体的説明はない。しかしエッセイ中の別の箇所、（すでに何度かヴェネツィアを訪れたことがあるという）ウォーが、このときは冬の一月にヴェネツィアに滞在し、そのときの町の様子を喜んでいる点は、注目してよいだろう。ウォーは、「わたくしはこの町を新しい相貌のもとで、詩的なメランコリーと神秘性とを湛えた相貌のもとで見た」、というのである。そしてわれわれはまた、先の引用文のひとつのなかで、ウォーが「18世紀ロココ様式の漆喰細工で飾られた繊細な小部屋」を喜んでいたことも思い出してよいだろう。ウォーにとって、詩的・メランコリック・神秘的・繊細がプラス価値で、そういう特徴をヴェネツィアは備えていたのである。

ウォーが取りあげたヴェネツィアとロンドンの対照の第二は、ヴェネツィアが「世界でもっとも美しい町」になり、ロンドンが醜い町になった、

その過程に関わる。この場合の対照も明示されていないが、暗示されているのは、ヴェネツィアが「近代化」しなかったのに対してロンドンは「近代化」した、という点である。その証拠としては、ウォーがヴェネツィアを「近代化」からの「避難所」として評価している点に注目すればよい。ウォーの挙げている事例はふたつある。ひとつは、メストレとマルゲーラについて、ウォーが「ヴェネツィア人は自分たちの島々に、これらの工業地帯からの避難所を持っている」、と述べていることである（p. 547）。もうひとつは、ヴェネツィア人がかつて北方からの侵入者から逃れるためにイタリア本土からヴェネツィアあたりの島々へ避難したことに関連させながら、ウォーが、ヴェネツィアを「じつは今でも避難所なのである」、と述べていることである。この町が「今でも避難所」だという意味は、「ヴェネツィアには車輪を使う乗り物がないということは誰でも知っているが、それを体験した者だけが、そのありがたさを理解できる」、ということである（p. 545）。このときウォーの念頭にあるのは、おそらく、「近代」文明を象徴する自動車が我が物顔に走りまわり、人間を片隅に追いやり危険にさらしている「近代」都市の様子だろう。ウォーは、その状態と、自動車が存在しないので人間が安心して歩ける「前近代的」都市ヴェネツィアの状態とを対照させて、ヴェネツィアのよさを指摘したと考えられる。

先の引用文中の、「イギリスの町であれば、市当局が間違いなく取り壊しを命じそうな建物」の内部に「18世紀ロココ様式の漆喰細工で飾られた繊細な小部屋」が隠れている、そして、それを保存しようとする運動してもイギリスの町であれば受け入れてもらえないだろう、という記述も、同様の対照が裏にあると考えられる。ウォーは、ロンドンのような「近代」都市が、町の外見を「近代化」するのに熱心で、内に隠れている美しいものを破壊してきたことを批判しているのである。

ロンドンとヴェネツィアとに関するこういう対照的認識に眼を向けながら、最初の引用文中の、「ロンドンは衰亡しなかった。周知のとおり、今日、ロンドンには贅沢はほとんどなく、いささか

の虚飾もない。だが、われわれは羞恥のあまり、ロンドンからは目を背けるのである、という簡潔な文章を見直すなら、行間に潜むウォーの考えが浮き出てくる。行間に隠れていた考えを補いながら、読み直してみれば、こうなるのではないだろうか。「ロンドンは衰亡しなかった（衰亡するどころか、「近代」都市として成功した）。周知のとおり、今日、ロンドンには贅沢はほとんどなく、いささかの虚飾もない（華麗で繊細な18世紀ロココ様式が存在しているような町ではない）。だが、「近代化」を成し遂げたロンドンの醜い姿を前にして）、われわれは羞恥のあまり、ロンドンからは目を背けるのである。」

ちなみに、「ロンドンには贅沢はほとんどない」という部分は、当時のイギリスの経済停滞を背景にしていると読めなくもないが、文章全体の主旨は、ロンドンは「近代化」に成功したゆえに醜い都市となった、という厳しい批判だろうと思う。それと対照的なのが、「近代化」しなかったゆえに、かつての美しいヨーロッパを保存しえたヴェネツィアだというわけである。ウォーは、醜い「近代」都市と美しい「前近代」都市との典型的対照を、ロンドンとヴェネツィアとのあいだに捉え、「近代」都市ロンドンを激しく批判する一方で、「前近代」都市ヴェネツィアのありかたを全面肯定している。

このエッセイの記述についてはさらに二つほど注目しておきたい点がある。第一は、ウォーが「ヴェネツィアが世界でもっとも美しい町である」といっている点である。すでに別の拙文「一九世紀のヴェネツィア観——異民族統治・美・貴族政」『ヨーロッパの都市と思想』（勁草書房1996）のなかでふれたように、19世紀にはいってしばらくすると、ヴェネツィアを美しい町とみなす認識が一般化していった。ウォーのエッセイが書かれた段階では、ヴェネツィアを美しい町だというのは常套句化していたといっていよい。しかし、このエッセイの表現で注目したいのは、ヴェネツィアが美しい町のひとつ、といわれているのでなくて、「世界でもっとも美しい町」だといわれていることである。ウォーがこの町の美しさをいかに高く評価したかが窺える。

第二に注目したいのは、「ヴェネツィアはロンドンとほぼ同じ年齢である」、という文である。ロンドンは紀元一世紀半ばに作られたローマの植民都市が起源である。ヴェネツィアは、紀元六世紀にイタリア本土の住民がランゴバルド族から逃れてきたのに始まる。したがって、ふたつの町の始まりには数世紀の間隔がある。しかしロンドンもヴェネツィアも、ウォーが引き合いに出した「アジアの大都市」——イスタンブール（紀元前8世紀）、バグダード（紀元前8世紀）、北京（紀元前12世紀）など——と較べれば、たしかに「ほぼ同じ年齢」ということになる。わたくしの推測では、おそらくウォーは、ヴェネツィアが（西ローマ帝国滅亡という）中世の始まりとともに生まれ、ヨーロッパの成長とともに成長した都市であることを重視していると思われる。その点を踏まえたときに、エッセイのまとめのところで、ヴェネツィアが将来瀕のなかに没するとき、「この町とともに、ヨーロッパの最後の栄光も消え失せるだろう」、といわれている言葉の重みがわかる。

## 5. 荷風と京都

「近代」都市を激しく批判し、「前近代的」な都市のありかたを肯定する、という点で、ウォーと並行関係を見せていた文学者に、永井荷風（1879-1959）がいる。ふたりの反応の仕方を並べてみれば、「過去主義者」の時空を超える精神の動きを捉えることができるだろう。

荷風といえば、東京についての見方が取りざたされることが多いが、その荷風に、京都への見方を綴った興味深いエッセイがある。エッセイは「十年振——一名京都紀行」と題され、1922（大正11）年に『中央公論』誌上に掲載されたものである。荷風がエッセイ中で述べているのは、この年に訪れた京都についての観察と省察であり、省察は東京への批判を踏まえている。

荷風は、10年来、東京を出たことがなかったが、この1922年10月に久方ぶりに京都を訪れた。この京都訪問は四度目で、それ以前の訪問は1897（明治30）年ごろ、1909（明治42）年、1913（大正2）年であったという（「十年振」p. 42\*<sup>21</sup>）。

1913年の京都滞在の折り、荷風は、祇園祭に出会って感銘を受け、島原で「幽暗なる蠟燭の火影」のもとで見た遊女と、角座の座敷の襖絵とに、「二十世紀の世界にはあろうとも思はれぬ神秘」を感じ取った。そして友人へ、「吾等は其の郷土の美と伝来の芸術の何たるかを討ね究めやうとすれば是非とも京都の風景と生活とに接触してみなければならぬ」という主旨の葉書を書き送ったという (Ibid)。このときの滞在で荷風は「近世の空気に侵されざる」京都の「幽静閑雅」——すなわち京都の「前近代性」——に強く惹かれたのである。

しかし荷風は、エッセイ「十年振」を綴るきっかけとなる1922年の京都行の際、この町にあまり期待をしていなかったという。なぜなら、

日々東京市の変革を目撃するにつけてわたしは独り京都のみならず国内の都市はいずれも時勢の打撃を受けて東京及びその近郊の如くになりつゝあるに相違ないと推測していたからである。然し幸にしてこの推測は当たつてゐなかつた。わたしが俄に京都を愛し京都に感謝せんとしたのはわが推測の少しく早計に過ぎたことを悔いたが為に外ならない (p. 52)。

すなわち、荷風は、旅に先立って、京都が「近代化」しているのを懼れていたのである。荷風は、1909年の京都滞在の際に、琵琶湖疎水工事が完成したことと、鴨川河原での夕涼みが前年から廃止されたことを聞いて悲しみ、「京都も亦東京の如く伝来の年中行事を失え終るの日も遠いことではあるまい」と思ったという。また、東大谷のみごとな松並木の風情を富豪の邸宅がはなはだしく害しているのを憤って、「京都の市街も早晚東京の日比谷に類する光景を呈するであらう」と思ったという (Ibid.)。

ところが、十年振りに荷風が訪ねた京都はまだあまり「近代化」していなかった。その発見に荷風の喜びがあった。荷風はいう——たしかに道路の道幅は広げられ、橋梁や河岸も改築され、洋風の商店が増え、人家の屋根が高くなり、「京都らしい閑雅の趣を失つた処」も少なくない。またかつ

て魅力を覚えた「寂しい町端の光景」のなかには消失したところもある。

然し京都には幸にして近世文明の容易に侵略することを許さぬ東山の翠巒がある。西山北山を顧望するも亦さほどに都市発展の侵害を被つてゐないやうに見えた。鴨河にはまだ幾條も日本風の橋が残つてゐた。粟田御所の堀外に蚊龍の如く根を張つてゐる彼の驚くべき樟の大木は十年前に見たときと変わりがなかつた。堀川の岸に並び立つ柳の老木は京都固有の薄暗い人家の戸口に落葉の雨を降らせてゐた。白川の小流れには女が染物を晒してゐた。大体に於いて今日の京都は今日の東京の如くに破壊せられてはゐなかつた。年々上野や芝山内の樹木の枯死するのを見てゐる東京人の眼には京都はいかにも松樹千歳の緑に包まれ青苔日に厚く自ら塵なき旧都であるやうに思はれる (p. 43)。

こうして荷風は、京都の周囲・市中の自然にも、市中の建造物にも、人々の暮らしぶりにも、「近代化」の波があまり及んでいないのを喜んだのである。つぎの箇所でも述べられている感慨もまた同様だが、ここでは、人心に「近代化」が及んでいない点に力点が置かれている。

この度京都の再遊はわたしをして恰も老夫の故山に帰臥したるが如き安慰を感じしめた。これ独り山水烟霞の為ばかりではない。街頭に新聞売の叫ぶを聞かず、電車に無礼の乗客なく、道に駄馬の斃死するを見ず、劇場に新しき文士先生の影を断ちたるこれ皆慰安の種とすべきである (pp. 53-4)。

「恰も老夫の故山に帰臥したるが如き安慰を感じた」という表現に、「過去主義者」荷風の面目がよく表れている。

荷風にいわせれば、京都にはまた、「近世の空気に侵されざる僧と妓」という「活ける宝物」があり、荷風は、これら二者が「東山鴨水」を背景に作りだす美しさを喜んだ。

流水と松籟の響に交る読経の声と、桜花丹楓に映ずる銀釵紅裙の美とは京都に来て初めて覚め得べき日本固有なる感覚の美の極致である——即秀麗なる国土山川の美と民族伝来の生活との美妙神秘なる芸術的調和である (p. 46)。

荷風のこういう京都賛美の背景には、急速に「近代化」が進行していた東京への激しい批判があった。その批判は、東京が情趣と個性とを失い、それとともに住民も野蛮になっていく、という面に向けられていた。

……都会にはまた其都会特種の情調の存すべき筈である。特種の情調なき都会の興趣に乏しきは恰も品性なき人物と面接するに同じである。匹夫は交を結ぶに難く特徴なき都市は永住の策を講ずるに適しない。現今の東京はさながらイカサマ紳士の徒に邸宅の門戸を大にして愚民を欺き驚すものと変がない。ここに居住する市民の年々野卑暴戾となるは当然の事であらう。

わたしは明治四十三年の秋隅田川の氾濫と其翌年浅草の大火とを以て江戸の古跡とまた江戸趣味との終焉を告ぐるものとなした。以後年々市区改正工事の進捗は市民が生活状態の変遷と相俟つて、僅に十年にして遂に東京市をして世界最醜の都会たらしむるに終つた (p. 53)。

上の引用のなかで特にいま注目したいのは、荷風が、「近代化」(「市区改正工事」)と「近代人化」(人心の変化)とを経験しつつある都市東京を「世界最醜の都会」といっていることである。荷風は、そのようにとらえた東京と、「前近代性」をまだ多く留めていた「幽静閑雅」な京都とを対比して、京都を賛美したのである。

## 6. ウォー、荷風、レニエの共通性

われわれはここでもう一度イーヴリン・ウォーを思い出してみよう。すると、荷風が「近代化」を遂げつつある東京を嫌い、「前近代性」を多く残

す京都を喜んだ精神の動きと、ウォーが、「近代化」の進んだロンドンから「羞恥のあまり」に「目を背け」、「詩的なメランコリーと神秘性を湛えた」「前近代」的都市ヴェネツィアに魅了された精神の動きが、じつによく似ていることに気付くだろう。このふたりに起こっていることを、逆に都市の側からいえば、荷風の場合には京都が、ウォーの場合にはヴェネツィアが、「近代化」を嫌うふたりの心の動きを触発したということである。これは、ヴェネツィアと京都が、ふたりの「過去主義者」として、「前近代性」の点で同種の重要な存在になったということに他ならない。

もうひとつ、ヴェネツィアに対するウォーと京都に対する荷風とを並行的に捉えるほかに、ヴェネツィアに対するレニエと京都に対する荷風とを並行的に捉えてみるのもおもしろいように思う。レニエは荷風のたいへん好んだ作家として知られているし、レニエと荷風を比較文学的に対比した赤瀬雅子『永井荷風とフランス文学』(荒竹出版, 1976)には、荷風について、「レニエの洗練の極にある文体、過去への憧憬、過去を再現しながら全く新鮮な感のあること、水の都に魅かれる点など、彼が〈先指をレニエに屈〉するとしたことは当然のことであった」との指摘がなされている (p. 168)。

ところで、荷風のエッセイ「十年振」の一節をもう一度見直し、それをレニエのエッセイ 'Venise retrouvée' (1924) の一節と並べてみることにしよう。まず荷風——

……粟田御所の塀外に蚊籠の如く根を張つてゐる彼の驚くべき樟の大木は十年前に見たときと変わりがなかつた。堀川の岸に並び立つ柳の老木は京都固有の薄暗い人家の戸口に落葉の雨を降らせてゐた。白川の小流れには女が染物を晒してゐた。大体に於いて今日の京都は今日の東京の如くに破壊せられてはゐなかつた。年々上野や芝山内の樹木の枯死するのを見てゐる東京人の眼には京都はいかにも松樹千歳の緑に包まれ青苔日に厚く自ら塵なき旧都であるように思はれる。

そしてレニエ——

わたくしは、来訪しなかった十年ののち、ヴェネツィアが、わたくしのかつて知り愛していたヴェネツィアとは別物になっているのではないかと懼れていた。だが、そうなのはいいことに気付いた。ヴェネツィアの相貌はあいかわらず同じである。………ありがたいことに、ヴェネツィアにはまだ市街電車も地下鉄もない。そして高貴な静けさのなかで、あいかわらず、鐘楼々々の鐘の音が聞こえる。鐘の音は、近代化の時をまだ告げないでいてくれる。

こうして並べてみると、荷風の京都に対する姿勢と、レニエのヴェネツィアに対する姿勢とのあいだに顕著な類似があることがわかる。ふたりとも、かつて愛していた都市を再訪する際に、それが「近代化」しているのではないかと懼れ、それが「近代化」をまぬがれていることを発見して喜んでいるのである。

しかも強調してよいのは、荷風の「十年振」は1922年に書かれた文章であり、またレニエの‘Venise retrouvée’は1924年に書かれた文章であって、荷風はレニエのこの文章を1928年以後に読んだという事実である\*22。つまり、この文章に関するかぎり、レニエから荷風へという影響関係はぜったいにありえないし、荷風からレニエという影響関係もむろんない。したがって、ふたりはまったく独立に、ほぼ同時期に、「前近代的」な都市に対する愛着（そして「近代性」に対する嫌悪）を、きわめて類似した仕方で述べていることになる。その意味で、このふたつのエッセイはふたりの「過去主義者」の心性の類似を証明するものだといえるし、またそういう心性の類似に、荷風がレニエを好んだ本質的理由のひとつがあると推測する手掛かりにもなるだろう。

## 7. 「楽園」としてのヴェネツィア

ところでジョルジュ・サンドは、一方で、ヴェネツィアについて、「自然はまことに豊かで、簡単に利用でき」、そこでは最下層の労働者も「快適な

生活」ができるといい、「好きなときに波止場の温かく滑らかな石の上を歌いながら歩き回ったり、その上に寝そべったりする、ヴェネツィア人のんきそうな足取り」に注目し、他方で、ひどい食事をするためにも「パリの平均的家族が毎日しなければならぬ果てしない苦勞」と、「パリの混雑のなかを、肘でかき分け押し退けながら進む、泥に汚れた群衆の顔に浮かぶ深刻で心配そうな表情」とに注目していた。ハウエルズも、ヴェネツィアの春に、アメリカの「忙しない苦闘生活」とは無縁の「〈無為の心地よき〉という深い感覚と、あらゆる目的や機会への無関心さ」を知ったと書いた。サンドとハウエルズは明言していないが、おそらくふたりはその際ヴェネツィアを「楽園」のイメージに重ね合わせていたであろう。

キリスト教圏でイメージされる「楽園」すなわち「エデンの園」の原型は、いうまでもなく『旧約聖書』の記述にある。それによれば、「エデンの園」は、神によって「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ」られている園であり、「園を潤す」川が流れている（訳文は『聖書・新共同訳』日本聖書協会1987による）。神は、この園に人を「住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた」。さらに神は人に、「園のすべての木から取って食べなさい」と命じたという。一方、この園から追放されたのち、人は「顔に汗を流してパンを得」、「生涯食べ物を得ようと苦しむ」のであり、人の耕す「土は茨とあざみを生えいさせる」こととなる。

まだ「エデンの園」にいられたときにも、人は「そこを耕し、守るように」されていたのであるから、労働と無縁でない。しかし園は「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ」られているのであるから、そこでの労働は軽度の快い労働であったということになる。いいかえれば、「エデンの園」は、あきらかに苦しい労働とは無縁の場所とイメージされているわけである。

もうひとつ、キリスト教圏では「楽園」のイメージは「天国」のイメージと重なり合うが、「天国」と重なり合う「楽園」イメージについては、ダンテが『神曲』天国編で提示している有名な箇

所を思い出すとよいだろう (Dante Alighieri, *La Divina Commedia*, 'Paradiso', Canto III)。そこでは、月光天で休らっている女性が、「わたくしたちの意志は、神様の愛の力で静まるのです。この愛は、わたくしたちが持っているものだけを望ませ、ほかのものに渴きを覚えさせることがないからです」といい、「神様のご意志のうちに留まるのが、わたくしたちのこの祝福された存在には本質的なことなのです。……主のご意志のうちに、わたくしたちの平安があるのです」といっている。すなわち、ダンテのイメージした「天国=楽園」にいる人は、神の愛の力によって与えられる「恵み」によって「意志=我執」を静められて欲望の束縛から解放され、「神のご意志」に身をゆだねて「平安」を得ているのである。

この二種の「楽園」イメージを踏まえながら、もう一度、サンドとハウエルズによるヴェネツィア記述を読み直せば、この町が「楽園」のイメージと重ねられていることが納得されよう。一方、「毎日しなければならぬ果てしない苦勞」(サンド)と「忙しい苦闘生活」(ハウエルズ)が、「楽園」追放後の人間の状態として捉えられていることもわかる。

ジェイムズの場合にも、先に引いた、「ヴェネツィア民衆の住居は崩れ、税金は高く、ポケットは軽く、働く機会はほとんどないに等しい……けれども、彼らは、よりよい条件に恵まれている多くの人たちよりも人生と良好な関係にあるように感じられる」、で始まる引用文と、「蒸気船は、すでに運悪く苦しい立場にあったゴンドラの船頭たちの没落を助け、立てる波で土台を崩して邸宅の崩壊を助け、大運河から平穏さという最高の長所を奪った」、で始まる引用文とをもう一度見直してみよう。すると、そこには「楽園」のイメージと「楽園」追放後のイメージの対比があったことが知られる。すなわち、自然が「親切」で、「陽光と閑暇と会話と美しい眺め」があり、民衆が「陽光のなかに横たわり、水浴びをし、明るい色の襦袢をまとい、さまざまな姿勢や調和を見せ、はてしない会話に興じ、かんたんに「幸せ」になれるヴェネツィアは、かなり「楽園」に近いイメージで捉えられているわけである。その一方で、人々

が「猛烈な速さで走りまわ」っているニューヨークと、「成功者にするには多くのものが必要」なアメリカとは、「楽園」追放後の人間の状態を示しているといえるだろう。

注目したいのは、ジェイムズまで時代を下ると、「前近代性」を「楽園性」と同一視する一方で、「近代化」を「楽園」追放後の状態と同一視する見方がかなり濃厚になっていることである。

レニエもまた、ヴェネツィアを「楽園=天国」と捉えていたことは、つぎの箇所にも明らかである。レニエにとってヴェネツィアは、ダンテの「天国」に似て、「我執からの離脱と心の平安」がえられる場所だった。

ヴェネツィアは、栄光という疲労を癒すために、静かに休息している。この静かさが、町の美しさに、さらなる美しさを添えている。しかも、この美しさは死の美しさではない。ヴェネツィアは、諸石と水の高貴さのうちに、一種謙遜にして壮麗な休息のうちに——おだやかな安らぎのうちに——つねに生きていて、この町をひんぱんにとおとずれる人々に恵みを与える。ここでは、ほかのどこにも増して、人はあらゆる欲望から免れることができる。この場所ほど、我執からの離脱と心の平安とに適したところはない。しかも、この離脱は後悔の念なしにおこなわれ、この平安は悲哀の気持ちなしに獲得される (*La vie vénitienne*, p. 30)。

レニエの認識の場合にも、ヴェネツィアの「前近代性」と「楽園性」とが結びついていることは、この町が「静かに休息している」——つまり「過去」のままに静止して「近代化」しない——一点を、「平安」の重要な要素とみなしていることに表れている。

そしてヴェネツィアが「近代化」しないのを喜んだブロッキーもまた、ヴェネツィアを「楽園」にもっとも近い都市だとみなしていた。

北方の人間ではあるけれども、わたくしの「エデンの園」観は天気にも気温にも基づい

ていない。わたくしは同様に、「エデンの園」から永遠性も住人も捨て去って構わないと思う。墮落していると非難されるのを承知でいえば、わたくしの「エデンの園」観は、純粋に視覚に関係しているもので、キリスト教の信条よりも画家クロード・ロランに関わりが深く、近似形態としてのみ存在している。これらの観点からいうかぎり、この町は「エデンの園」にもっとも近い (*Watermark*, p. 20)。

今回取りあげた欧米の文学者たちのなかで、ヴェネツィアを「楽園=天国」のイメージに重ね合わせていないのはウォーだけである。おそらくそれは、ウォーのキリスト教信仰が徹底的に正統的であったことと関わっているのであろう。正統的信仰にしたがえば、この世は「楽園」追放後の状態にあるのだから、この世のなかにある場所が「エデンの園」に重なったり近接したりするはずがないのである。

### おわりに

この拙稿で指摘したかった点は三つある。

第一に、都市ヴェネツィアが、19世紀30年代頃から20世紀末に至る過程で、「前近代性」を積極的に評価されてきたという点である。

第二に、そういう評価は、「近代的」大都市への居住経験のある「過去主義者」に特に顕著に表れたということである。

第三に、そういう賛美に際して、「前近代的」都市ヴェネツィアが「楽園」のイメージで把握されたということである。

最後に、上記の三点について付言したいことがある。「過去主義者」たちが都市ヴェネツィアに割り振った「前近代的な楽園」という役割は、おそらく多くのヴェネツィア人が自分たちの都市に望んでいた役割ではあるまい。なぜなら、都市ヴェネツィアでは「近代化」の努力が絶えずなされてきたからである。事の真相はむしろ、「過去主義者」たちが自分たちの嫌悪する「近代化」と「近代」都市にないものを、無理にも、ヴェネツィアに見つけだそうとしたというのに近いであろう。それは、ジェイムズがヴェネツィアの庶民を、絶

望的な貧困状態にも関わらず、「楽園=天国」にあるかのごとく捉えたことにも表れているし、また、レニエの視野には、マルゲーラ地区でおこなわれていた「近代化」の努力がまったく入っていないことにも表れているし、ウォーとプロツキーがヴェネツィアの「近代化」の努力に対して全面否定的であったことにも表れている。

「過去主義者」荷風と京都の「前近代性」との関係も、これら欧米の「過去主義者」たちとヴェネツィアの「前近代性」との関係と同様であった。荷風もまた、京都でおこなわれていて——おそらく多くの京都人の必要としていた——「近代化」の努力に否定的な態度しか見せず、この都市の「前近代性」のみを評価したのである。

しかしまた、「過去主義者」たちによる都市ヴェネツィアの性格に関する歪曲は、少なからぬ同時代人の感じてきた必要性の表現であったという側面もまた見逃せない。マリネッティ等「未来派」が良しとした、進歩への信頼、前進への意志、秩序への志向、都市性への愛好、機械性への賛美、という価値観は、人間性の可能性の半面を実現する一方で、残りの半面を否定するものである。したがって、そういう価値観に沿って出現する「近代(現代)」都市もまた、少なからぬ人々にとっては、醜く、人間を拒否し、人間性を歪ませる場所とみなされるのは当然の成り行きであった。そういう人々のなかの一部をなす「過去主義者」たちは、人間性を回復する場所を「近代」大都市とは異質の場所に求めており、そういう「楽園」をヴェネツィアに捉えたのである。

### [註]

- \*1 Luciano Caruso ed., *Manifesti futuristi*, Firenze: S.P.E.S. No. 61, 1990.
- \*2 Alberto Cosulich, *Venezia nell'800: vita, economia, costumi*, San Vito di Cadore: Edizioni Dolomiti, p. 64.
- \*3 Leopoldo Magliaretta, 'La qualità della vita', in Emilio Franzina ed., *Venezia: storia delle città italiane*, Roma-Bari: Editori Laterza, 1986, p. 355.
- \*4 Cf. Maurizio Reberschak, 'L'Economia', in Franzina ed., *Venezia*.
- \*5 『世界遺産全データ大事典』新人物往来社 1998.
- \*6 同書.

- \*7 Montesquieu, *Voyages*, in R. Caillois ed., *Oeuvres complètes*, I, Paris: Gallimard, 1949, p. 559.
- \*8 Joseph Addison, *Remarks on Several Parts of Italy, &c., in the Years 1701, 1702, 1703*, in Richard Hurd ed., *The Works of Joseph Addison*, London: George Bell & Sons, 1909, vol. I, p. 390.
- \*9 Frédéric d'Agay ed., *Lettres d'Italie du Président de Brosses*, Paris: Mercure de France, 1986, Vol. I, Lettre XIV, p. 193.
- \*10 Byron, *Childe Harold's Pilgrimage*, IV, 1, in Jerome J. McGann ed., *Byron*, Oxford & New York: Oxford U.P., 1986.
- \*11 August von Platen, *Sonette XXII*, in *Werke*, München: Winkler Verlag, 1982, Vol. I, p. 379.
- \*12 Le comte Daru, *Histoire de la république de Venise*, 12 vols., Bruxelles: N.-J. Gregoir v. Wouters et c<sup>ie</sup>, 1840, vol. I, p. 6.
- \*13 John Ruskin, *The Stones of Venice*, Vol. I, in E. T. Cook & A. Wedderburn eds., *The Works of John Ruskin*, London: George Allen, 1903, p. 17.
- \*14 George Sand, *Lettres d'un voyageur* (English translation), London &c: Pengu Books, 1987, p. 85.
- \*15 Henry James, 'Venice', in John Auchard ed., *Italian Hours*, Pennsylvania: The Pennsylvania State U.P.
- \*16 William Dean Howells, *Venetian Life*, 2 vols, Boston & New York: Houghton, Mifflin & Co., 1892, vol. I, p. 87.
- \*17 *Italian Hours*.
- \*18 Henri de Régnier, *La Vie vénitienne*, Paris: Mercure de France, 1963.
- \*19 Joseph Brodsky, *Watermark*, London: Hamish Hamilton, 1992.
- \*20 Donat Gallagher ed., *The Essays, Articles and Reviews of Evelyn Waugh*, London: Methuen, 1983.
- \*21 『荷風全集』第15巻, 岩波書店1963.
- \*22 「レニエーのエネチア遊記アルタナを読む」(『断腸亭日乗』昭和3年10月2日の記載)

## Venice as a Haven from Modernization: What a Premodern City Meant to 'Passatisti'

TORIGOE J. I. Teruaki

In this essay I have tried to shed some light on the meaning that the city of Venice had for *passatisti*, i.e. anti-modernists or dropouts of modern society, such as Henry James, Henri de Régnier, Evelyn Waugh and Joseph Brodsky. To clarify the distinctive quality of their response to the city that has retained a great deal of premodernity in the modern world, I have touched upon other types of response by (mostly) earlier writers: criticisms on the city's moral degradation by Montesquieu and Joseph Addison, an amused report on its immorality by Charles de Brosses in the eighteenth century, and, after the fall of the Venetian Republic in 1797, nostalgic dirges for its glorious past by Byron and August von Platen, as well as searches for causes of the city's decline by Comte Daru and John Ruskin. I have also cast a glance, for a better clarification of the *passatisti's* attitude toward Venice, at similar responses by slightly earlier writers, George Sand and William Dean Howells, and also at the way Kafu Nagai, a Japanese *passatista* writer, was attracted to the premodern aspect of Kyoto.

The following are the points that have been brought out in the essay: (1) Venice has been appreciated for its premodern quality from about the 1830's to the present; (2) such appreciation has been particularly remarkable among *passatisti* who experienced living in modernized big cities; and (3) in such appreciation, the premodern Venice has often been equated to a paradise on earth.

The premodern paradise that the *passatisti* saw in Venice has probably been contrary to the desire of many Venetians, since efforts for the city's modernization have never been abandoned. In a way, the *passatisti* saw only what they wanted to see. The need they felt, however, was real, because modernity, which emphasized rationality, progress, clarity, order, and machine mentality, has realized only half of the human potentiality, and because the modern metropolis incorporating modernity has been a place repellent to many sensitive people. The *passatisti*, who felt alienated in modernized big cities, satisfied their need in the premodernity of Venice.

キーワード Venice modernization passatisti